

# 東日本大震災から10年

## 宮城県名取市・明観寺門徒の引地さん夫妻に聞く

### 自宅が津波に襲われ家族失う

東日本大震災から10年。宮城県名取市の明観寺(三浦善詔住職)を訪ね、母・久子さん(当時80)と姉・まゆみさん(同48)を亡くした門徒の引地晴美さん(56)と夫賢司さん(56)にこの10年の歩みを聞いた。(8面に関連記事)

#### 当時思い出し言葉が止まる

同寺の百力日法要(2011年6月19日)などで取材に応じてくれた晴美さん。再会に「私も孫2人のおばあちゃんになりました。あれから10年だから」とほほ笑んだ。一緒に法要に参拝していた当時高校3年生の長男・隆太さんは27歳。仙台市内の機械製造メーカーで働き、結婚して娘(9カ月)を持つ父親になったという。

◇ 2011年3月11日。海

岸線に近い名取市小塚原地区にある引地さん宅は、地震で家財やガラスが散乱。晴美さんと隆太さんは、久子さんと体の不自由なまゆみさんの手を引き、畑のビニールハウスに逃げ込んだ。晴美さんが犬の鎖を解くために再び家に戻った時だった。背丈を超える大津波が押し寄せた。隆太さんは夢中で祖母を抱えたが、気づけば自分ひとりが隣家のハウスの柱につかまっていた。

晴美さんはとっさに近くの倉庫の2階に上り、必死に3人を呼び続けた。その声が届かぬ、柱につかまり



宮城県名取市・明観寺で、東日本大震災から10年の思いを語る引地賢司さん・晴美さん夫妻。左は三浦善詔住職と慶子坊主

## 「あの出来事を思い出さなければならぬ」



仙台市で2011年9月8日に営まれた東北教区東日本大震災現地追悼法要で、引地晴美さんは「追悼のことば」を述べた

の元に向かった。

真夜中になると母の声が消え入りそうになり、身を案じて濁流の中を泳いで助けに向かった。ずぶ濡れの母と子は倉庫にあったビニールシートにくるまり、身を寄せ合って一晩を過ごした。祖母とおばの姿は見えなかった。

晴美さんの夫・賢司さんは、農業のかたわらで勤めていた仙台市の会社で地震に遭った。同じく仙台で働いていた長女と一緒に急いで家に向かう車中、晴美さんの携帯電話がつかなくなった。「3人が流された」。

#### 同じ場所に自宅を再建

名取市内に入った頃には辺りは暗くなっていた。少し離れた所までしか行かず、自宅の角は冠水していた。賢司さんは長女を車に残し、そこで出会った友人と2人で胸元まで水に浸かりながら家を目指した。片方の手が油のようなものにまみれてヌルヌルしているのが月明かりに照らされて見えた。いくら拭いてもぬぐい取れない。「指がザックリと切れていて、油のようなものは血だった。寒さで感覚がなく、痛みは感じなかった」。

漂流物をかき分けながら1時間あまり歩いたが、たどりの着けずに断念。「途中で電話で妻が隆太と一緒にいることがわかり、それだけが救いだ」。翌朝、海水が幾分引き、友人と流されてきたボートを拾い妻子

の元に向かった。

当時の様子を語っていた賢司さんから嗚咽が漏れた。「2日目、救助活動が少しずつ進み、道路脇にはご遺体がいくつも寝かされていた。夜に浸かりながら歩いた道にも、家族を助けるために私たちがたどった道を踏みつけていたのかもしれない。そう思うと、賢司さんは肩を震わせ、「震災の経験を伝えなければ」と思うが、あの光景はあまりにも…。できれば二度と思い出したくない」。それ以上は言葉にならない。

石やアスファルトがゴロゴロと出てくる。地域の人口は半減した。「補助や補償で支援していただき、機械はリースだが毎年米がとれるようにはなった。全体で見れば復興はまだまだかもしれないが、前には進んでいる」。

晴美さんは「パートを増やしたり、とにかく忙しくすることで乗り切ってきた」が、今でも屋根や地面を打つ雨音に心がざわつき、恐怖で洗濯機に入ることでもできない。「あの出来事を思い出さなければ、普通に年をとってきた」という思いと「思い出さずに生きることができない」ともわかっていて「この感情が交錯する。それでも、孫たちには何かあったら、とにかく逃げる」とだけ伝えたいと思っている。

この日会えなかった隆太さんに電話で取材した。隆太さんは、地元の農業高校に通っていた頃、祖母の畑仕事を手伝うのが日課だった。幼い頃からいずれば祖母や父と一緒に農業をと思い続けてきた。「ばあちゃんが残してくれた土地だから。つらい思いはしたが、私にはあの場所が故郷なので」と語る。

進学、就職と懸命に生きてきて、震災の記憶は薄らいでいるというが、くじけそうになった時は、「二人(祖母とおば)の分までしっかり生きなければ」と奮い立たせてきた。そして、「今は守るべき家族がいる」と前を向く。

◇ 3月11日は墓参りで家族が集まる予定だ。賢司さんは「10年は節目かもしれないが、『たった10年』とも思う。やっぱり心はあまり変わってないのかな」と声を絞って語った。